

| | |
|----------|------------------------------------|
| 氏名 | おかもと わこ 岡本 和己 |
| 学位(専攻分野) | 博士(学術) |
| 学位記番号 | 博甲第878号 |
| 学位授与の日付 | 平成30年3月26日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 研究科・専攻 | 工芸科学研究科 建築学専攻 |
| 学位論文題目 | 京都における景観の形成過程に関する研究 |
| 審査委員 | (主査)教授 小野芳朗 教授 中川 理 准教授 岩本 馨 |

論文内容の要旨

本論文は、景観は人々の思想に基づく生活や活動の結果が表層として現れたものであるという観点から、京都の景観の価値付けの実態を構造的に研究するものである。本論文では、特定の関係者が時代の要請や彼らの属性を踏まえ景観の「価値」、即ち目標となる景観を定めることを「価値付け」という。

前述の通り、景観は人為的作用の表層でしかなく、今後、これらの景観を守っていくにはその形成過程の構造を把握し、その上での保全計画が必要となってくる。現在のような表面的な景観のみを捉えた方針では対応しきれず、今、新たな視点での景観対策が求められていると考える。

では今後どのような景観対策が成し得るか。本論文ではその課題を明らかにするために、2つの手法により京都における価値付けの実態を分析する。

ひとつは都市全体に作用し得る景観の要素による分析であり、第1部で取り上げる。都市の様々な場所をひとつの媒体によって横断的に読みとこうという試みである。そして、その媒体として京都の代表的な植栽景観であるサクラの景観を取り上げた。もうひとつは都市における生活や生業に焦点をあてた分析であり、第2部で論じる。その対象として、近世から京都の食を支えてきた市場としても有名な錦市場を取り上げた。

本論文は序論、5章からなる第1部、5章からなる第2部の二部構成による本論、結論により構成される。

第1部では京都のサクラ景観の形成過程の構造を解明する。

第1章では、分析の対象となるサクラを提示し、類型化を行った。

第2章では、「風致」の概念に注目が集まる戦前期の京都中心部のサクラを対象に、その景観形成を分析した。その際、京都府や京都市所蔵の植樹に関する一次史料を用いることで、京都市内全体のサクラの実態、すなわち、どの主体が、どのような意図をもって、どの空間に桜景観を現出させたのかをより厳密に明らかにした。また、都市史の観点からサクラが植樹される過程を都市全体の動きとして捉えることによって景観形成の文脈としてのサクラの植樹を論じた。

第3章では、戦後期の京都中心部のサクラの植樹過程を分析した。その際、戦後期は「価値付け」により景観が形成されたと仮定した。その上で、計画が企画されてから実施されるまでの過程で作成された資料から、価値付けを行う機関・関係者の属性、彼らの目標とする景観、そして

時代の要請の3点を明らかにし、どのような人為的作用によって景観が成り立っているのかを解明した。

第4章では、戦後期の嵐山のサクラが分析の対象である。京都中心部のサクラ植樹の動きとも合わせて、嵐山における価値づけの実態を解明した。

第5章では、以上で明らかとなった京都のサクラ景観の形成過程を図示し、その構造を示した。

第2部は、第2部では食にまつわる場として錦市場を取り上げ、文化的景観という考え方により、京都の生業により形成された景観を分析した。

第1章では、錦市場の現状と現在の錦市場に対するイメージを提示した。

第2章では、魚問屋の特権制度が廃止されて以降の錦市場の空間的、組織的構成を解明した。

第3章では、昭和2年に京都市中央卸売市場が開設したことにより、錦市場の空間的、組織的構成がどのように変化したのかを生業に即して分析した。錦市場は問屋と仲買の移転により小売市場と転身するが、このことが錦市場を構成する空間や組織へも影響を与えたことを考察した。

第4章では、百貨店の誕生により、これに対抗するため小売市場において「横のデパート」化が目論まれ、アーケードの建設が進んだことを、当時の商店街に関する研究や新聞記事などにより裏付けた。その上で、錦市場でも同市場組織が「横のデパート」という価値付けにより空間構成を変化させたことを明らかにした。

第5章では、錦市場が旅行雑誌により価値付けされ、受動的に観光地化していく様子を旅行雑誌『るるぶ』により考察した。また、錦市場による主体的な価値付けも分析するため、伊藤若冲のブランディングについて考察を行った。

第6章では、前章までの成果をまとめ、錦市場の今後の景観対策について考察した。

以上の考察の結果をまとめ、結論としている。

論文審査の結果の要旨

第1部では、都市のサクラ植樹をめぐる論考は、ナショナリズムの意味合いや、経済的要因をあげるものが多かったが、本論文ではそれらと一線を画し、一次資料に基づく実証的検証から、行政、学者というその決定プロセスに関わったステークホルダーたちの意図により、植樹がなされている。なかんずく京都は桜をシンボルとして使い、都のイメージを創造するためにクローン種であるソメイヨシノを多く植え、それがナショナリズムの高揚につながるものであったという歴史学の論に対して、景観を修飾するためのツールとしてのソメイヨシノ、かつ列植に適するクローン種ソメイヨシノが街路並びに河川、疏水沿いに植えられていく昭和戦後の時代の実態を明らかにしている。こうした体系的検証は、桜に象徴される都市の景観が、行政や学識経験者という主体の意図する景観への「価値付け」に起因することが明らかとなり、換言すれば、景観とは単なる表象的存在ではなく、都市形成手段、都市インフラともいえる構造的存在であることがわかるのである。

同様の事例を嵐山のモミジと桜にみており、そもそも明治期に、はげ山である嵐山を平安の景観復活、つまり復古的日本のイメージ創出のため桜を植えてきた方針が、市部が桜で満たされる昭和40年代、やはり王朝のイメージとして紅葉を復活し、その後、紅葉と桜の混在した景観としたのは王朝イメージに加え、観光客誘致という新たな価値であった。このように、時代によって

価値は変えられ、その主導を行政と学知が担うという構造が明らかになっている。

第2部では、都市景観の一種として京都・錦市場の近代、特に昭和の京都市中央卸売市場が開設されて以降の市場の変遷を検証した。市場は単なる物売りの場ではなく、生産物、消費者、利用者の連なる都市の動脈と静脈のパイプである。これを都市史的に解析することで、市場をめぐる、食による都市文化のダイナミクスを知ることが可能となる。その点では京都・錦市場は祇園町への供給、京都の台所、そして観光相手の市場と変遷してきており、その将来の在り方とともに、人類の食の在り方を考える全国、世界のモデルとなりうる事例を解析した。

以上の点で、審査員は本論文の都市史学的意義と、その展開に評価を与えることに意義を認めた。

本論文の基礎となった論文は、都市史、建築学での査読付き論文(1)(2)で、いずれも申請者が筆頭著者である。

(1)岡本和己・小野芳朗「京都の桜 その戦前期の景観形成過程」日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第81巻 第722号、1047-1057頁、2016年4月。

(2) 岡本和己・小野芳朗「京都市街地と郊外嵐山の植栽景観の形成過程における価値付けの実態 戦後期のサクラ・マツ・カエデを事例として」日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』第82巻 第732号、555-565頁、2017年2月。